

## A S D ・ 知的障害児に対して「非認知能力」 （社会情動的コンピテンス）をどう育むか

企画・司会者	吉井勘人	（山梨大学教育学部）
話題提供者	吉井勘人・青木雄一	（山梨大学教育学部／山梨大学教育学部附属特別支援学校）
	原田 崇	（宮崎県立延岡しろやま支援学校）
	長崎 勤・海老沢萌里・長田彩里	（実践女子大学生活科学部生活心理専攻）
指定討論者	佐竹真次	（山形県立保健医療大学）
	亀田良一	（元群馬県小学校教員）

KEY WORDS: 非認知能力 自閉スペクトラム症児 スクリプト

### 【企画趣旨】

近年、読み・書き・計算といった学力テストで測定される“認知能力ではないもの”としての「非認知能力」への関心が高まっている。「非認知能力」とは、自尊心、自制心、内発的動機づけ、社交性、共感性、向社会性などの社会情動的コンピテンスを幅広く含む広範な概念であり、明確な定義は難しいものの、この能力が、人の身体的・精神的健康、ウェルビーイングの高さ、問題行動を起こす可能性の減少などに影響を及ぼすことがわかっている（OECD, 2018）。これまでスクリプト（生活の文脈）を用いた発達支援は、ASD 児の言語・コミュニケーション能力の促進や社会的スキルの獲得とその般化への効果があることが報告されてきた（長崎ら, 2006）。本シンポジウムでは、ASD 児や知的障害児の「非認知能力」に焦点を当て、スクリプトを用いた支援が、その発達に与える影響を広く検討したい。なお、各話題提供者の事例報告は、保護者等の承諾を得ている。

### 【話題提供者の趣旨】

#### ●「ASD 児同士の協同活動の発達支援—「友だち列車」ルーティンを用いて—」吉井勘人・青木雄一

ASD 児は、大人との間で協同活動が成立することが報告されているが（森澤ら, 2018）、ASD の子ども同士で協同活動が成立するかは十分に検討されていない。そこで、知的障害を伴う ASD の子ども 2 名（DA2～3 歳）に対して、協同活動の遂行ができるように「友だち列車」ルーティンを設定して支援を行った。その結果、ASD 児のペアは、「捕まえる役割」としてフープを一緒に持ち、楽曲が止まったら、歩く役割の児と一緒にフープをかける行動ができるようになり、子ども同士の協同活動の獲得可能性が示された。加えて、日常生活における仲間との相互作用では、子ども同士で協同活動ができるようになった時期から、仲間への援助行動や共有行動がみられるようになった。これらの関係から、協同活動の成立がペア間での親密さや利他性の促進に寄与した可能性が推察された。

#### ●「知的障害児の性的行動問題の改善—特設スクリプトによることばの獲得の効果—」原田 崇

性的行動問題を抱える A に、A の生活文脈を活用した面談型特設スクリプトを実施した。スクリプトは、設定・実行・確認の 3 つの主成分で構成されている。今回は、「設定」で A の生活文脈を活用したストーリーやその状況画の提示。「実行と確認」では、支援者の語りかけを工夫した。すると、4 か月後にはセルフコントロールができ、性的行動問題の改善が促された。A の羞恥心や誇りといった情動やその情動を表現する「はづかしい」と「かつこいい」といったことばの獲得が促進されたためと思われる。（設定：これ

から行うスクリプトへの注意の喚起や準備、またこれから生起する全体の流れを見通す成分。実行：スクリプトの中心部となる成分。確認：スクリプトの終了、フィードバックや次のスクリプトへの転回点となる成分。）

#### ●「5 歳自閉症児への椅子取りゲームを通しての情動表出と情動調整の発達支援」長崎 勤・海老沢萌里・長田彩里

5 歳の自閉スペクトラム症（ASD）児に、椅子取りゲームでのルール理解・情動の表出・情動調整を支援した。初期には、負けるとお茶を飲みに行く行動方略、中期には負けた際に、「ダメ」等の言語方略、後期では悔しくて泣き、「くや（しい）」等の言語方略、「もう一回」等のメタ認知方略での自己調整が増えた。後期には、負けると母親に抱きつき泣く行動方略、ピアに「じゃんけんしようよ」等の言語方略・メタ認知方略での相互調整が見られた。中・後期に、大げさに床に座り込む負けたピアへの注目を促したところ後期には自発的に頭を撫でた。以上から自己→相互調整、行動→言語→メタ認知方略の発達プロセスで、悔しい等の感情の表現と他者との共有が可能になることが確認され、負けた他者への注目の重要性が示唆された。

### 【指定討論者の趣旨】

●佐竹真次 「共感」と「システム化」を対比させた理論が注目されているように、非認知能力の中でも特に「共感」は社会性や向社会的行動を考える上でも鍵となるのではないかと考えている。今回の話題提供では、協同活動、性的行動、情動調整等をめぐってのスクリプトを活用した臨床的介入が紹介されているが、その結果として、言語や行動の変容の他に、「共感性」が変化したと思われる微妙な証拠のような現象が観察されなかったかどうかについて質問し、スクリプトによる非認知能力育成の可能性について討論を深めたい。

●亀田良一 非認知能力は、主に人との関わりの中で育まれていくものだと考える。その意味では、遊びの要素とされる三間（時間・空間・仲間）が必要になるだろう。スクリプト指導の中では、そこに積極的に関与する指導者の存在も重要になる。取り上げる場面によって「仲間」となるのは友だち、指導者、ST など様々である。その差異に応じて指導者の役割も変わってくる。発表内容に即して、「仲間」に焦点を当てて指定討論を進めたい。

（文献）OECD 著・無藤隆・秋田喜代美監修（2018）社会情動的スキル：学びに向かう力。明石書店。

（YOSHII Sadahito, AOKI Yuichi, HARADA Takashi, NAGASAKI Tsutomu, EBISAWA Moeri, OSADA Sari, SATAKE Shinji, KAMEDA Ryouichi）